

NHK学園生涯学習フェスティバル

那智勝浦短歌大会

昨年9月、台風12号による記録的な豪雨と水害に見舞われた那智勝浦町。寺本真一市長をはじめ、大会関係者の知己にも被害者が出ました。世界遺産「那智大社」・「那智の滝」なども被害を被り、大会の実施が危ぶまれていましたが、年を越え、町を活性化させるため「那智勝浦短歌大会」が2012年4月12日(木)、那智勝浦町体育文化会館で実施されました。初めて開催された大会は、6人の選者(井谷まさみち、伊藤一彦、大塚寅彦、小黑世茂、篠弘、東直子)を迎え、200人もの短歌ファンが参加しました。

また、「大会参加型」の短歌スクーリング「那智勝浦短歌紀行～霊地・熊野那智大社と本州最南端潮岬をたずねる～」も実施。熊野への造詣が深い小黑世茂講師の案内のもと、那智大社・那智の滝・補陀洛山寺・潮岬等、パワースポットでもあり古くから歌に詠まれた場所を多く巡り、添削教室や大会観覧などを通じ、濃密な2泊3日の旅程を満喫しました。

と き / 二〇一二年四月十二日(木)

と ころ / 和歌山県那智勝浦町

那智勝浦町体育文化会館

演 題
現代の人間表現

講 師
篠 弘

「現代の人間表現」

篠 弘

近代以降の短歌のテーマ

早速、今日の課題に入りたいと思います。明治四十三年という年は、この百年の中で大事な年なんですね。明治四十三年は一九一〇年ですから、二〇一二年の今年からすると百年前。この年が、私どもが今作っている近代から現代の歌の実質的な出発の年だったと言えるかと思っています。ですから、この百年の短歌の歴史というものが、私どもにとって貴重な遺産として輝いているというふうに思っています。

若山牧水の実質的な第一歌集である『別離』、前田夕暮の『収穫』、吉井勇の『酒ほがひ』、それから私の恩師である土岐善磨——土岐哀果の『NAKIWARAI』、そして年末には石川啄木の『一握の砂』、これらすべてが明治四十三年に出ているんですね。これほど、当時の若者がこぞって歌集をまとめ、世に問うということとは異例のことでした。短歌の歴史は長いわけですが、人間を詠める、人間の生きている姿をありのままに表現し得るということが、初めて火を噴いた年であると、私は常々述べてまいりました。

今日は、そのような昔の話をして、ダイレクトな収穫は少ないことと思います。そこで、戦後の歌を拾ってみることにいたしました。今申し上げた、百年前に第一歌集を出された人たちのものも含めて、戦後、その人たちがどのように活躍されていたか、しかも、今日引用する歌のほとんどを、皆さんが気づかないままでいた。つまり、昔ながらの近代短歌以来の尺度から見ると認められなかった歌、無視されていた歌、それらから拾ってみていくこととします。

ひと言で言いますと、近代からの歌は、病苦、貧困、家庭内不和、この三つが大きな特色、三大テーマでした。石川啄木を思い出すと、すぐにわかりますね。病気があり、お金が入っても自分のためにすぐ使い切ってしまうって貧困である。そして親とも仲が悪く、最後には奥さんともうまくいかず、家庭内不和を巻き起こす。人間が詠われていたとは言え、そのようなテーマが近代短歌の主流になっていました。したがって、寂しい歌、悲しい歌が多かった。ところが、今日ご紹介しますように、二十一世紀である今の視点からそういう人たちも含めた戦後の歌を見ますと、「こんな歌があったのか」ということに気がつきます。それを、これから申し上げることにします。

茂吉の生身の本音

最初に結論を言いますと、現在、生真面目に作った歌は皆が同感しない。不真面目な歌がいいというわけではありません。つまり、

生真面目すぎる悲しい歌とは、もう別れたい。もっと伸びやかに内面を詠むような歌が欲しいという、そんな時代に入っているかと思えます。

まず、斎藤茂吉の歌を挙げました。斎藤茂吉は明治四十三年の三年後、大正二年に『赤光』という歌集を出し、同じ年に北原白秋が『桐の花』を出しました。この年も明治四十三年に引き続いて、近代短歌の出發にふさわしいと言えます。この斎藤茂吉の戦後の歌から三首引きました。

あかがねの色になりたるはげあたまかくの如くに生きのこりけり

こんな歌が茂吉にあったのかなと思います。茂吉は昭和二十八年に七十歳で亡くなりました。これは昭和二十四年の歌ですから、六十代の歌ということですが。茂吉の写真を見ましても、こんなにはげているとは思いません。でも「あかがねの色になりたるはげあたま」というように、誇張しているんですね。いろいろな薬品会社が毛の生える薬を売っていますが、だいたい不発ですよ。うまくいきません。茂吉は、あえて「あかがねのようになったはげ頭だ」と自分のことを言っています。そして、「かくの如くに生きのこりけり」、ようやく生き延びたと。敗戦直後は、もっとかしまった歌を作っていました。無事に生き残ったという喜びを、自分をあざ笑う、自嘲するように詠んでいらっしやる。こういう歌は珍しいものでした。

また、二番目の歌も同じで、自分の身の衰えを赤裸々に詠んでい

ます。

人皆のなげく時代に生きのこりわが眉の毛も白くなりにき

前の歌で「はげあたま」と言っておいて、今度は「眉」を詠んでいます。このように自分の身体を詠む、体の変化を詠む。この身体感覚というのが二十一世紀は大事なんですね。体で捉えるということに、自らの本音が出てくるんです。「人皆のなげく時代」という敗戦後の歌で、「白き山」という有名な歌集に収められています。「わが眉の毛も白くなりにき」、これは「わが眉も白くなりにき」でいいのですが、あえて「眉の毛も」として体の部分を強調しています。これも、今申し上げたように、体で捉えるという身体感覚です。つくづく、鏡に向かつて眉の毛の白さを感じる、身の衰えを如実に詠むという歌が出てきたわけです。上の句と調和して、孤立していく命の衰えを詠んでいます。

次は「つきかげ」という、最後の歌集からです。これは、茂吉が亡くなった昭和二十八年の翌年、二十九年に出た歌集で、今、再評価されています。一首目は「小園」という歌集から、次が「白き山」、この三首目が「つきかげ」という歌集です。茂吉を信奉する人の中では、「白き山」が良いというのが圧倒的です。特にアララギの人たちは「白き山」が最高傑作だと言います。私は、戦中戦後の苦悩を詠んだ「小園」が好きですが、最近はこの「つきかげ」という最晩年の歌が評価されるようになりました。やはり、生身の本音が出ているんですね。でも、この歌は変な歌です。

人間は予感なしに病むことあり癒れば楽しなほらねばこまる

そうですね。予想通り病気になるという人もたまにはいますけれど、図らずも病になるわけです。「癒れば楽しなほらねばこまる」というのは当たり前ですよ。こんなにくだけた口語文体の歌が『つきかげ』にはあるんです。病気が治れば楽しいというのは常識です。「癒れば楽し」と言っておいて、「なほらねばこまる」と言う。こんな歌を茂吉が作っていたことを、お集まりの方はどなたもご存知ないかもしれません。



このように、戦後の茂吉の歌はそれまでの型にはまった万葉調のようなものとは大幅に違う歌が出ています。最晩年の傑作として今まで評価されてきたのは

いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはま
るらしも

という歌です。いつのまにか太陽が沈む。「うつせみの」というのは我が身ですね。文豪の川端康成さんも、この歌が大好きだと言っていました。でも、こんなとりすました大げさな歌よりは、「なほらねばこまる」という歌のほうが、現代ではかえって人気がある。図らざる時代になりました。こんなふうには、本音をつぶやくように、ささやくように詠む。そういう人間の内側、人には言えない弱みのようなものを詠んでいるんですね。

長老たちの期待

私は早稲田で学びましたので、土岐善麿、窪田空穂という長老にお世話になりました。お二人とも長生きで、空穂はあと二カ月で九十歳という八十九歳、土岐善麿も九十四歳十カ月、実質九十五歳まで生きました。この二人が長生きでしたので、私はさばれなかったんですね。出版社で忙しく仕事をしていましたが、長老が長生きしていて、私が歌を書いたり出したりしますと、ひと言ずつ批評が返ってきました。お世話になったと思っています。この空穂のとほけ



た歌も、なかなかの魅力です。

若き日の疲れ知らざるころ癖なほも残りて老を侘びしむ

空穂はずっと健康でした。四月十二日に亡くなるのですが、その三日前まで歌を作っていました。今日はそれをご紹介するゆとりがありませんが、なかなか傑作なんです。「若き日の疲れ知らざるころ癖」、いつまで経っても、いつ自分が死ぬかもわからないぐらい健やかな、自然体で生きている自分。しかし、疲労を知らない習慣が自分にある。そして「なほも残りて老を侘びしむ」と言うんです。こういうふうに生きたいものです。

「なほも残りて老を侘びしむ」という中には、やはり、わずかながらでも疲れを感じているのだらうと思うんです。「若き日の疲れ知らざるころ癖」という、内面的な、自然体で自分の命というものを詠む歌が現代人にはピンと響いてくる。おそらく、今日お集まりの方たちも依然として若さを認識していらっしやる方が多いと思います。

次の歌がまた笑わせます。

目に見ねば己が白髪を忘れては子らが白髪をあはれみてる

お子さんも、空穂と同じように白髪の早い人たちでした。「子らが白髪をあはれみてる」、五十年代、六十年代になったお子さんたちも、当然白髪です。それを「目に見ねば己が白髪を忘れては」、自分の白髪は見えない、「子らが白髪をあはれみてる」という、おとほけの歌も作っているんですね。

そして、次、これも八十年代に近い歌です。

想ひ出でて独り笑みするたのしきよ命のよろこび無きにもあらず

「独り笑い」「独り笑み」という歌を作られる人も時折いますけれど、なかなか作りにくいものです。これはやはり、生き長らえてきた命を、自らひそかに肯定する。自分の生き方、存在をいとおしむ。そんな歌かと思えます。

善磨の歌にまいりましょう。

秋がくれば秋のネクタイをさがすなり朽葉のいろの胸にしたしく

これは晩年の歌ですが、今までの近代歌人は、こういう歌をあまり作りませんでした。私は昭和三十年から出版社にいましたけれども、比較的早く百科事典の編集長になってしまったんです。という

のも、私は昭和八年生まれですが、大正世代が戦争で亡くなった
り、控えめな人がいたりして、明治四十年代の上役から、昭和一桁
がいきなり責任を担う時代になってしまったわけです。長老の編集
者の中には、一年中同じネクタイをしている人もいたんですよ。今
どきはいないと思いますけれど。土岐先生は、東京の下町の出身で
すが、しゃれっ気の多い人で、私もその影響を受けて、いく分しゃ
れっ気があるほうです。いろいろな影響を受けました。

「秋がくれば秋のネクタイをさがすなり」、こういった発想は近代
歌人の中でも珍しい。「朽葉のいろの胸にしたしく」、最近では男性
でもピンクのネクタイをする人も増えていきますから、「朽葉のいろ」
などの茶褐色ではなくて、もっと派手な色を選ぶ人もいるかもしれ
ません。「秋がくれば秋のネクタイをさがすなり」、爽快な感じです
ね。一種のしゃれっ気のようなものは、八十年代を迎えるとはいえ、
九十五歳まで生きるわけですから当然かもしれませぬ。こんな歌が
胸に響いてまいります。

次も、誰も詠まなかった歌ですね。

上下二巻の校正をおわり疲れたりああ著者ほどに読むものありや

晩年に、『土岐善麿歌論歌話』という上下二巻を、先生ご自身で
まとめられました。私も編集に協力したんですが、校正もご自分で
なさいました。もともとジャーナリストでしたから、土岐先生
は。この感じはわかりますね。「上下二巻の校正をおわり疲れた
り」、明治・大正・昭和時代からの自分で納得できる論文やエッセイ

を、二冊の大著にすべく校正したんですね。その疲労感というより
も、まとめた後の渴望というのでしょうか。若い人への期待を込め
て言っているのだと思います。

「ああ著者ほどに読むものありや」、これも発想、切り口が新しい。
去年になります。私も二十世紀の短歌論を『残すべき歌論』とい
う厚い本にまとめました。去年の正月二週間は、その校正に明け暮
れたんです。それ以外の仕事は何もしませんでした。その文章の中
で引用した原文を、それが発表された当時、明治・大正・昭和時代
の雑誌に当たりました。当たり直したわけです。自分の書き写し間
違いもあるだろうし、校正のミスもあるだろうし、元を辿ってみま
したが、丸二週間かかりました。その時に「ああ著者ほどに読むも
のありや」と思ったんです。こういう実情、実感を超えて、残すべ
き本への祈りのような気持ち、「これを若い人たちが利用してくれ
たらいいなあ」という願いを、こういう形で、書き残した者の熱情
を訴えています。

次は、しゃれっ気があると同時に、照れ性の歌です。

あともう何本もすうわけではないからと禁煙うやむやに年改まる

土岐先生は、奥さんと末のお嬢さんと一緒に暮らしてました。末のお嬢さ
んは、今、入院なさっていますけれど、大正生まれですから、やむ
を得ません。結婚されて一週間から十日で、ご主人は戦地に赴かれ
たまま、ついに帰りませんでした。結局、このお嬢さんが最後まで
土岐先生の面倒をみたことになります。そのお嬢さんや奥さんから

言われたのでしよう、「おじいちゃん、そろそろたばこはやめたら？」と。先生は、最後まで缶ピースを持って歩いていました。実は私、棺の中に缶ピースを二つしのばせたんです。誰にもわからないうちに、亡骸に花を散らすふりをして、ちよと両手のあたりに入れました。そして、骨上げ式になりました。ところが、缶ピースの缶は溶けないんですね。缶がパーンと開いてしまっていました。みんなはすぐに「あ、缶ピースだ」とわかりましたが、私はずうっと黙っていました。三年前のある時、「実は私が入れたんだ」とエッセイに書きましたが、それまでは黙っていたわけです。ご家族が「きつと、おじいちゃんが両手に缶ピースを持って棺に入ったのだろう」と衆議一決してくれました。そういう方でした。この歌は、まさに照れているんですね。「あともう何本もすうわけではないから」と。このように、口語文体、会話体を使って詠んでいるケースです。

近代歌人の眼力を想う

最初に会話体を使ったのは、なんと石川啄木でした。

「石川はふびんな奴だ。」ときにかう自分で言ひて、かなしみてみる。

こういう歌があります。口語体の中でも、会話体を生かした最初の歌です。そのうち、昭和年代を過ぎて、俵万智さんの「寒いね」

と話しかければ……」や、「……カンチューハイ二本で言ってしまうといいの」などがはやってきますけれど、明治四十年代にもあるし、土岐善磨もこういう形で詠んでいるんですね。

次に、土岐さんとたいへん仲の良かった釈逋空。土岐さんが東京の下町のジャーナリストで、しゃれっ気のある派手な感じの人であったのに対して、逋空は大阪の生まれで、しかも民俗学者、宗教学者、神道の学者でありました。まるでタイプの違い人でした。逋空先生のほうはしつとりと落ち着いていて、「ひそけさ」「かそけさ」という言葉を多用される歌人でした。歌集を読み直してみますと、違うんですね。次の歌は、逋空の遺詠とされています。これは、まったく逋空らしい、神がかった歌です。

人間を深く愛する神ありて、もしもの言はゞ、われの如けむ

おそろしい歌ですね。私は早稲田の学生でしたが、よく国学院に逋空先生の授業を聞きに行ったものでした。いちばん後ろのほうの席に座って聞いていました。逋空先生が入っていらつしゃると、皆、最敬礼です。皆さんもご存知の岡野弘彦さんという歌人がいらつしゃいますが、その岡野さんが先生に続いてお茶を捧げ持つて歩いてきて、それを先生のテーブルに置くわけです。早稲田大学とはまるで違いました。早稲田はがやがやとしていて、講義の途中に「休憩、一服しよう」と皆でタバコを吸いましてね。「それじゃあ、後半を始めよう」という様子でしたが、国学院は「捧げ筒」のような感じの、すごい学校でした。逋空は、「人間を深く愛する神あり

て、もしもの言はゞ、われの如けむ」、このような遺詠を残されているわけです。このようにかしこまった、大それた、生真面目すぎる、いかんともしがたい、動かしがたい歌ばかりかと思いましたが、戦後の歌に、あるんです、そうでない歌が。

我よりも残りがひなき 人ばかりなる世に生きて 人を怒れり

自分よりも、更にひどい奴が生き残って、いい奴はみんな死んでしまったというんですね。事実、逡空さんが息子にした春洋さんという方も、硫黄島で亡くなってしまいます。自分の中のすきんだ気持ち。「我よりも残りがひなき」というのも相当なものですけれど、そういう時代になって、自分が怒りやすくなっているという、すきんだ気持ちの歌もあるんですね。「神のような自分のもの言いだ」というものとは大違いです。

次もそうです。

何こともなかりしごとく 朝さめて洩瓶の水を くつがへしたり

これが斎藤茂吉と違うところです。斎藤は、洩瓶ではなくてバケツを置いていたらしいです。トイレに行くのが面倒でバケツにしたらしく、これがなんと、斎藤茂吉記念館に飾ってあるんですからおかしいですね。そして、そのバケツには「極楽」という名前がついているんです。逡空は、バケツではなく洩瓶でした。でも「洩瓶の水」というのはおかしいじゃないですか。「コップに水」ならわか

りますが、「洩瓶の水」。つまり、これは尿であり、古い言葉で言うところ、ゆばりであるわけです。この洩瓶の水をひっくり返したという。ここに逡空の多少の美意識があるんですね。

今から思うと、逡空は早死にでした。六十八歳です。茂吉は七十歳でした。こういう歌が——慎ましく詠んでいますけれど、老いた自分の醜くて人には言えない、気恥ずかしいものをちゃんと詠んでいるのです。ですから、生身の人間であった側面がここに表れています。逡空門下は、神がかった先生のこういう歌は挙げないでしょう。



熊野那智大社



那智山青岸渡寺

私の学生時代、迢空先生の講演を聞かせていただきました。また、当時、「時事新報」という新聞があり、迢空選の短歌欄がありました。私はそこに投稿していて、迢空先生はよく取り上げてくれていたんです。後で聞いたところによると、実際には岡野弘彦さんが下選をしていたらしいですね。迢空先生が、「篠君といったね、君は。土岐さんに習っているそうで、幸せですよ」と言ってお下さったことがあります。いただいたたつたひと言でしたが、嬉しいものでした。私の尊敬する学者の一人ですが、「漫瓶の水をくつがへしたり」と。私は、まだそこまでいっていませんのでこういう歌はできませんが、そのうち、作るかもしれません。

このように、前半で紹介しただけでも、自嘲、自らを嘲る、あるいは身の衰えを詠む。人間の弱み、疲れ、おとほけ、それから自己肯定。あるいは、しゃれっ気、祈りのような渴望。それから、自分が照れている状態、またはすすんでいる気持ちとか、「漫瓶の水をくつがへしたり」というような、図らざるむなしさ。こういった歌。近代の歌人は、生真面目すぎて悲しい歌が多かったと言いますが、戦後の風土の中で、若い人たちの動きも見ていらしたのだと思います。

私たちは、このようにして詠んでいらしたという歴史を、知ることが可能です。

継承すべき遺産

続いて、土屋文明さん。百歳まで生きた土屋文明さんの歌です。



勝浦漁港



紀の松島

この人は、やはりたくましいですね。私も、二度三度とお目にかかりました。若い時に、女学校の校長先生をしていらしたんですね。一度で人の名前を覚えていました。小学館時代の私の後輩が文明さんの所に行きましたら、「篠君は、相変わらず百科事典をやっているのかね？」と言われたと伝えてくれました。和歌森太郎という歴史学者もそうでしたが、記憶力がすごい。先生というのはそういうものかと、びっくりしました。

次の歌はやはりすごいですね。我々にこういう歌はできません。

十といふところに段のある如き錯覚持ちて九十一となる

皆さん、頑張ってください。ともに頑張りましょう。長生きしましょうよ。要するに、段があるというんです。

六十九歳から七十歳でひとつの段。七十九歳から八十歳でひとつの段がある。そして九十一歳になってしまった。「十といふところに段のある如き錯覚持ちて九十一となる」と。図太い土性骨どじょうぼねと言うんでしょね。高崎の貧農に生まれたのですが、それはともかくとして、そういう図太さ、たくましさ。文明さんは東京の青山に住んでいらつしやいました。たまに昼寝をされるということは聞いていました。

私が伺ってお目にかかった時は、ほとんどが裸足でした。素足で泥の感触を楽しんでいらつしやる。そして、半日ぐらいは、植木をいじっているんです。草木を植え替えたり、枝を落としてみたり。たくさん切らずに、五センチぐらい切つては「もういい。また明日切るんだ」などと言っていました。農村の出ですけれど、土に親しむということ、長生きされたのだらうと思います。

足しびれ立ち出でざりし幾日か今年の竹の高く伸びたり

こういう歌は「つまらない歌だなあ」と思われますよ。足しびれ立ち出でざりし幾日か、調子が悪かったのでしょうか。「今年の竹の高く伸びたり」、これは竹の生命力です。自分がちよつと目を

離している間に、こんなに伸びている。こういうたくましい命とともに生きている。共有し合っている、共存し合っているという、そういう感覚ですね。そういう感覚が身についていらつしやる。これが、まねのできないところです。

そして、次です。

左より少しく黒き右の指太く見ゆるまで何はたらきし

これは、歌集に入っていない歌です。自分を励ますところがあります。「左より少しく黒き右の指」、原稿もたくさん書いていたでしょう、歟も握っていたでしょう。「太く見ゆるまで何はたらきし」、これも身体感覚ですね。自分の存在を我が身で感じ取る。

近代歌人にも、戦後の混乱期の中でもこんなに人間味のある歌があるということを見ました。ですから、我々自身も命との抗い、これを第一歌題にしていきたいわけです。

近代の歌人が、病苦、貧困、家庭内不和といったものが主題だったと言いましたが、決してそうではなく、命との抗いというものを、人生の中盤から後半の中で見事に充実させていた。むしろ、戦後における、こうした現実的な人間味に富んだこういう表現こそ、我々に最も近い、継承すべき遺産として、考えてもいいのではないかと改めて思いました。そういったことを、今日はご報告させていただきます。

ご清聴ありがとうございました。